第7章

都市下層民の生活実感

生活実感をそれぞれの地区の人がどのように評価しているのかをみていく。

この3年間の生活は向上したのか悪化したのか，また，今後3年間で生活は向上しそうか悪化しそうかを尋ねた（質問表　質問30を参照）。この二つの軸を組み合わせると，とくに将来については不明層がでるために，計12の生活実感に関わる組合せが可能である。このなかで，とくに二つの型の人の属性を比較することにする。一つは，この3年間で生活は向上し，今後3年間も向上すると見なしている完全楽観型の生活実感を有する人である。もう一つは，この3年間で生活実感は悪化し，今後3年間も悪化すると見なしている完全悲観型の生活実感を有する人である。

この二つの比率が，(イ)それぞれの調査地でどのような構成になっているのかを最初にみていく。次いで，(ロ)そうした人の属性を確かめることにしたい。

第1節　生活実感，楽観型と悲観型

地区別の生活実感をみていく。

生活実感をa)これまで3年間生活は向上し，これから3年間も向上するとみなす固有の完全楽観型と，これに加えて，やや広くこれまで3年間は生

活が向上し，これから3年間生活は変わらないとする生活実感も完全楽観型の生活実感とする。また，対極的にb）これまで3年間生活は悪化し，今後3年間生活は悪化するとみなす固有の完全悲観型と，これに加えてやや広くこれまで3年間は生活は悪化してきたし，今後3年間についてはわからないとする生活実感も完全悲観型の生活実感とする。そして，各地区の悲観度を測定するために，b）完全悲観型の生活実感からa）完全楽観型の生活実感を引くことにする。悲観的な生活実感が強ければ，＋で示され，楽観的な生活実感が強ければ，－で示されることになる（第Ⅱ－10表，第Ⅱ－11表参照）。

(イ)　アンカラにおいては，悲観的な生活実感は53.3％（固有な完全悲観型42.7％，この比率については第Ⅱ－10表参照）と半数を越え，楽観的な生活実感は8.0％（固有な完全楽観型6.7％）にすぎない。首都の都市下層民の半分以上が悲観的な生活実感を有する。定義のように悲観度を算出すると，アンカラの悲観度は45.3％となる（悲観度については，第Ⅱ部第5章215ページおよび第Ⅱ－11表参照）。ただし，首都においては，都市下層民の間にも楽観的な生活実感を有する集団が8.0％ほど存在することも事実である。

以下同様にして，悲観度および，その対極的にある楽観的な生活実感層の存在する程度に注目して各地区の特性をみていく。

(ロ)　地方大都市ガジアンテップにおいては，中心地区では悲観度は37.5％，郊外地区では43.3％である。中心地区ではアンカラほど悲観度は高くなく，郊外地区ではアンカラとほぼ同様な高い悲観度を示す。ただし，地方大都市においては楽観的な生活実感はほとんど存在せず，中心地区でわずかに2.5％存在するに限られる。地方大都市の中心地区では，楽観的な生活実感層はわずかしか存在しないが悲観度は首都ほど高くない。しかし，郊外地区では，楽観的な生活実感層は存在しないで，悲観度は首都と同様に高くなる。

(ハ)　新興工業中大都市メルシンにおいては，悲観度は郊外（農村）風地区セルジュク地区で31.4％と最も高く，準中心地区シテラル地区で23.3％であり，逆に，東南部からの流入者の多い郊外地区デミルタシュ地区で

11.5％と著しく低い。アンカラ，地方大都市ガジアンテップの地区に比較して，メルシンの3地区の悲観度は一様に低い。逆に，楽観的な生活実感層は，悲感度のもっとも高い郊外（農村風）地区セルジュク地区の5.7％を除くと，他の2地区では10.0％，17.1％存在し，アンカラの楽観的な生活実感層（8.0％）を越えるほど存在する。

新興工業都市メルシンにおいて，準中心地区シテラル地区では楽観的な生活実感層は存在するのであり（10.0%，アンカラよりやや大），悲観度は低い（アンカラの約半分）。郊外（農村風）地区セルジュク地区では，楽観的な生活実感層はある程度は存在するが（5.7％，アンカラ以下），悲観度（31.4％）はメルシンの準中心地区（23.3％）よりも高い。また，東南部地域からの流入者の多い郊外地区デミルタシュ地区では，楽観的な生活実感層が相当多く（アンカラの倍），悲観度は大いに低い（アンカラの約5分の1）。楽観的な生活実感の強い地区である。

(ニ) 中都市トラブゾンにおいては，中心地区ザファール地区で悲観度は23.3％，豊かなエセンテッペ地区で－17.2％（すなわち楽観度17.2％），郊外バフチェジック地区で14.3％である。トラブゾン3地区の悲観度は，他の都市の悲観度よりも著しく低い。楽観的な生活実感層は中心2地区においては多く存在する。中心地区ザファール地区では10.0％であり，豊かなエセンテッペ地区で34.3％と他のどの地区よりも著しく多い。これに対して郊外地区バフチェジック地区ではわずかに5.7％に限られ，アンカラ以下である。

中心地区ザファール地区では，楽観的な生活実感層は存在し（10.0％，アンカラよりやや大），悲観度はやや低い（23.3％，アンカラの約半分）。ちょうど，メルシンの準中心地区シテラル地区と同じである。豊かな中心地区エセンテッペ地区（34.3％）では，著しく多量の楽観層が存在し，悲観度ではなく楽観度が著しく高い。郊外地区バフチェジック地区では楽観層がある程度存在し（5.7％，アンカラ以下），悲観度は低い（アンカラの約3分の1）。

(ホ) 地方町ネブシェヒルにおいて，350エブレル地区では悲観度は

28.0％である。小都市では悲観度は新興工業中大都市や中都市よりも高い。しかし，楽観的な生活実感層も10.0％は存在する。

(ヘ) 地方町ビュンヤンにおいて，中心地区では悲観度は52.0％と著しく高く，逆に，豊かな郊外地区では悲観度は12.0％著しく低く，両極に分化している。地方町では中心地区でも郊外地区でも楽観的な生活実感層はちょうどアンカラと同じであるが（8.0％），悲観的な生活実感が中心地区では60.0％と著しく高いために，悲観度は最も高くなる。地方町の豊かな郊外地区では楽観的な生活実感層も存在するが（アンカラと同じ），悲観度は大いに低い（アンカラの4分の1）。

悲観度は一方で，アンカラと地方大都市で高く，他方，小都市と地方町の中心地区で高い。悲観度に従って12地区を整理すると次のようになる。

a）悲観度の高水準（30％以上）な地区（高い順に5地区）。

地方町ビュンヤンの中心地区（52.0％），首都アンカラの地区（45.3％），地方大都市ガジアンテップの郊外地区（43.3％）と中心地区（37.5％），新興工業都市メルシンの郊外（農村風）地区セルジュク地区（31.4％）である。

b）悲観度の中水準（20％代）な地区（高い順に3地区）。

小都市ネブシェヒルの350エブレル地区（28.0％），新興工業都市メルシンの準中心地区シテラル地区（23.3％），中都市トラブゾンの中心地区ザファール地区（23.3％）である。

c）悲感度の低水準（20％未満）の地区（高い順に4地区）。中都市トラブゾンの郊外地区バフチェジック地区（14.3％），地方町ビュンヤンの富かな郊外地区（12.0％）である。新興工業都市メルシンの，東南部地域からの流入者の多い郊外地区デミルタシュ地区（11.5％），さらに，中都市トラブゾンの富かな中心地区エセンテッペ（－17.2％）である。

第2節　生活実感，典型的な二つの型の担い手像

第2節では，典型的な二つの生活実感の型として，完全楽観型と完全悲観型を形成する人の属性を，年齢，収入，使用部屋数からみていく。また，それぞれの集団が，社会的態度を測定する三つの指標（三つの指標に関しては第Ⅱ部第8章参照）でみると，どのような社会像を描くかも検討していく（第Ⅱ－10表参照，第Ⅱ－14図，第Ⅱ－15図参照）。

(イ) 首都，アンカラの（郊外）地区では，完全悲観型は完全楽観型の平均年齢より大幅に高年齢であり（平均年齢45.8歳，36.3歳），地区の平均年齢44.2歳よりも高年齢である（各地区の二つの型の年齢については，第Ⅱ－14図折れ線1，2参照）。アンカラとガジアンテップについては収入を示す数値が無いために，実際の家賃やあるいは想定家賃（自宅所有者に実際借りたらいくらと思うかを聞いたもの）によれば，完全悲観型では想定家賃は完全楽観型よりも低い（1万3200リラ，1万5000リラ，1985年）である（各地区の二つの型の家計収入や家賃（実際の）については，同図折れ線3～6参照）。また，三つの指標では，完全悲観型の方が完全楽観型よりも意欲は低く（3.12，楽観型3.33），拒否反応は高く（2.16，1.50），そして不満は高い（3.15，2.33）。完全悲観型は，完全楽観型に比較して（以下同じ），a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・高拒否・高不満である（各地区の二つの型の指標値については，第Ⅱ－15図参照）。

(ロ) 地方大都市，ガジアンテップでは，中心地区で完全悲観型は完全楽観型と年齢的にはほとんど変わらないか逆に低く（44.1歳，45.0歳），完全悲観型の実際の家賃は完全楽観型よりも大幅に低く（1万7500リラ，3万リラ），使用寝室数も少ない（1.6部屋，3.0部屋）。完全悲観型の方が生活水準は低いと推定可能である。三つの指標でみれば，この中心地区では完全悲観型は完全楽観型より意欲が著しく高く（4.13，楽観型2.00），また，拒否反応も高い（2.6，1.00）。また，不満は高い（3.56，3.00）。完全悲観型は，a）同（低）年齢・低収入であり，b）高意欲・高拒否・高不満である。

ガジアンテップの郊外地区では，完全悲観型しか認められない。年齢は，地区の平均より少し高年齢である（44.3 歳，地区平均 42.7 歳）。完全悲観型の想定家賃は地区全体よりも低く（1万3600 リラ，地区平均1万2800 リラ，1985 年），それだけ地区全体の平均に比較して生活水準は低いといえよう。三つの指標でみれば，地区平均より意欲は低く（3.09, 3.33），拒否反応は高く（2.64, 2.08），不満も高い（3.25, 3.16）。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・高拒否・高不満である。

(ハ)　新興工業中大都市，メルシンでは，郊外（農村風）地区セルジュク地区で，完全悲観型は完全楽観型よりも大幅に高年齢である（43.7 歳，33.5 歳）。完全悲観型の収入は完全楽観型の収入よりも低い（家計収入，6万9500 リラ，9万5000 リラ，1986 年）。また，実際の家賃も悲観型が楽観型より低く（1万8300 リラ，2万7000 リラ），悲観型の生活水準は低いといえよう。三つの指標でみれば，完全悲観型は完全楽観型よりも意欲が低く（3.38，楽観型 3.50），拒否反応で高く，不満でも高い（第Ⅱ－10 表参照）。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・高拒否・高不満である。

準中心地区シテラル地区では，完全悲観型は完全楽観型よりも高年齢である（40.4 歳，34.3 歳）。ただし，このシテラル地区では完全悲観型の収入は完全楽観型よりも高い（9万7400 リラ，9万1700 リラ）。三つの指標でみれば，完全悲観型の方が完全楽観型より意欲と不満は高いが，拒否反応は低い（2.10, 3.00）。悲観型は，a）高年齢・高収入であり，b）高意欲・低拒否・高不満である。

東南部からの流入者が多いデミルタシュ地区では，完全悲観型は完全楽観型よりもやや高年齢（41.4 歳，38.8 歳）である。完全悲観型の収入は完全楽観型よりも大幅に低い（7万1000 リラ，13万リラ）。三つの指標でみれば，完全悲観型の意欲は低く（3.30, 3.83），また，拒否反応はやや低い（2.13, 2.17）。また，不満は高い。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・低拒否・高不満である。

(ニ)　中都市トラブゾンでは、中心地区ザファール地区でも完全悲観型は完

全楽観型よりも高年齢である（36.6 歳，29.3 歳）。また，完全悲観型の収入は完全楽観型よりも低い。三つの指標でみれば，完全悲観型は完全楽観型に比較して意欲が他の地区と同じように低く（3.50, 4.67），拒否反応は高い。しかし，例外的に不満はわずかに低い（2.60, 2.67）。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・高拒否・低不満である。

富裕なエセンテッペ地区でも，完全悲観型が完全楽観型よりも高年齢（44.3 歳，35.4 歳）である。完全悲観型の収入は完全楽観型より低い（7万7600 リラ，13万8400 リラ）。三つの指標でみれば，完全悲観型は完全楽観型に比較して意欲は高く，その水準も高い（3.83, 3.42）。拒否反応は低く，不満は高い。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）高意欲・低拒否・高不満である。

郊外地区バフチェジック地区でも，完全悲観型は完全楽観型に比較して高年齢である（42.6 歳と 35.0 歳）。ただし，メルシンのシテラル地区と同様に，完全悲観型の収入は完全楽観型よりも高い（6万6200 リラ，6万500 リラ，しかし，個人収入では低い）。三つの指標でみれば，完全悲観型の意欲は高いけれども完全楽観型よりも低い（3.40, 3.63）。また，拒否反応は完全楽観型に対して大いに高い（2.75, 楽観型 1.50）。さらに不満は，完全楽観型よりも高い。完全悲観型は，a）高年齢・高収入であり，b）低意欲・高拒否・高不満である。

(ホ) 小都市ネブシェヒルの豊かな 350 エブレル地区では，完全悲観型は完全楽観型よりも高年齢（44.7 歳，43.2 歳）である。完全悲観型の収入は完全楽観型より低い（8万200 リラ，9万7500 リラ，しかし，個人収入では逆に高い）。三つの指標では，完全悲観型は完全楽観型に比較して意欲が高く（3.67, 3.40），拒否反応も大いに高く，そして不満も高い。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）高意欲・高拒否・高不満である。

(ヘ) 地方町ビュンヤンでは，中心地区で，完全悲観型は完全楽観型に比較して高年齢である（52.4 歳，39.5 歳）。ただし，この地区では完全悲観型の収入は完全楽観型より著しく高く，ほぼ倍である（7万5600 リラ，3万7500 リラ）。三つの指標でみれば，完全悲観型の意欲は高く，完全楽観型とはぼ同じ

である（3.47, 3.50）。拒否反応は高く，不満は高いけれども，完全楽観型よりも低い。完全悲観型は，a）高年齢・高収入であり，b）同水準の意欲・高拒否・低不満である。

地方町の郊外地区では，完全悲観型は完全楽観型よりも高年齢（51.4 歳，41.0 歳）である。完全悲観型の収入は完全楽観型より低い。三つの指標でみれば，完全悲観型の意欲は高いが，完全楽観型よりは低い（3.75, 4.50）。拒否反応は低く，不満も低い。完全悲観型は，a）高年齢・低収入であり，b）低意欲・低拒否・低不満である。

以上をまとめると，完全悲観型は，完全楽観型に対して，(イ)年齢的には一様に高年齢である（例外は地方大都市ガジアンテップの中心地区，第Ⅱ－14，－15図参照）。(ロ)収入の点では，低収入である（例外は，新興工業都市メルシンの準中心地区シテラル地区，中都市トラブゾンの郊外地区バフチェジック地区，地方町ビュンヤンの中心地区）。(ハ)意欲の点では，低意欲である（例外は，地方大都市の中心地区，メルシンの準中心地区シテラル地区，中都市の豊かな中心地区エセンテップ地区，小都市の豊かな350エブレル地区である。）(ニ)拒否反応の点では，高拒否である（例外は，地方都市の中心地区エセンテッペ地区，郊外地区デミルタシュ地区）。(ホ)不満の点では，高不満である（例外は，中心地区ザファール地区と地方町2地区の計3地区）。例外的に，地方町の2地区では悲観型が楽観型に比較し不満が低い。

第3節　生活実感と関わる二つの要因，年齢と出身地

各層の生活実感を，年齢別，出身地別にみていく。

20代，30代などの年齢階層別に完全楽観型と完全悲観型の比率（年齢階層人口に占める各型の人口比率）を，各型の地区平均比率と比較する。

年齢階層ごとに完全楽観型が地区平均を超える地区を数えれば，20代の年齢階層では7地区が該当する（11地区のうち，ただしガジアンテップの郊外地区

には楽観型は存在しない。第Ⅱ－11表参照)。とくに，新興工業都市メルシン，中都市トラブゾン，地方町ビュンヤンにおいて，準中心地区（シテラル地区25.0％）や中心地区（ザファール地区18.2％，エセンテッペ地区71.4％，ビュンヤンの中心地区66.7％）で楽観型が多い。とくに，トラブゾンの豊かな中心地区エセンテッペ地区や地方町の中心地区以外にも，トラブゾンの専門管理職の多かった郊外地区バフチェジック地区（50.0％）で，過半数が楽観的な生活実感を有し，地区平均の同比率を大きく上回わる。

30代の年齢階層で完全楽観型が地区平均を超える地区は4地区であり，40代の年齢階層では2地区，50代では3地区，60代では存在せず，70代では1地区である。年齢が増加するにつれて完全楽観型の地区は減少する。

これに対して，完全悲観型が地区平均を超える地区を数えれば，20代の年齢階層では3地区（12地区のうち）にすぎない。地方大都市ガジアンテップの郊外地区（57.1％），新興工業都市の郊外（農村風）地区セルジュク地区（40.0％），中都市トラブゾンの中心地区ザファール地区（36.4％）である。前2地区では30代，40代よりも20代に悲観型が多い。また，ザファール地区の20代では，完全楽観型も完全悲観型もそれぞれ地区平均を上回り両極分化の傾向がみられる。

完全悲観型が地区平均を超えるか等しい地区は30代の年齢階層では7地区であり，40代では6地区，50代では10地区，60代では5地区（該当10地区のうち）が完全悲観型を示す。高年齢になると完全悲観型が増え，とくに50代ではアンカラを除く11地区で完全悲観型が地区平均より多いか同じとなる。アンカラでも平均とほとんど変わらない（50.0％，平均53.3％)。50代のうち，アンカラ（50.0％），地方大都市ガジアンテップの二つの地区（83.3％，57.1％），新興工業都市メルシンの二つの郊外地区（66.7％，60.0％），地方都市トラブゾンの中心地区（50.0％），小都市ネブシェヒルの地区（57.1％），地方町ビュンヤンの中心地区（62.5％）の8地区では，住民の半分以上が完全悲観型の生活実感を有する。このように，典型的には20代が完全楽観型の生活実感を有し，50代が完全悲観型の生活実感を有する。本

章第2節でみたように，完全悲観型は完全楽観型よりも平均年齢が高いことに一致するのである。

次に，出身地別にみれば（第Ⅱ－11表参照），出身地別集団の完全楽観型が地区平均を超える地区は農村出身者では6地区であり，非移動者では1地区（アンカラ，該当11地区のうち）に限られる。都市出身者では4地区（該当10地区のうち），町出身では3地区（該当11地区のうち）。農村出身者が非移動者よりも楽観的な見方を有するという一般的な指摘を，このデータも裏付ける。

農村出身者の間で完全楽観型が地区平均を超える地区は，首都アンカラ，新興工業都市メルシンの郊外（農村風）地区セルジュク地区，準中心地区シテラル地区，中都市トラブゾンの郊外地区バフチェジック地区，地方町ビュンヤンの2地区の6地区である。このうち首都アンカラでは，非移動者（11.1％）や都市出身者（20.0％）が農村出身者（8.3％）より高い比率で完全楽観型を示し，トラブゾンの郊外地区では町出身者（8.3％）が農村出身者（5.9％）より高い比率で完全楽観型を示す。農村出身者がこの高い完全楽観型を示すのは，この6地区のうち新興工業都市メルシンの2地区（8.3％，15.8％）と地方町ビュンヤンの2地区（33.3％，8.3％）である。二つの都市に流入した農村出身者は，最も多く完全楽観型の生活実感を有するのである。

また，出身地別集団の完全悲観型が地区平均を超える地区は，農村出身者で8地区（該当12地区）である。非移動者では6地区（該当11地区），都市出身者で2地区（該当10地区），町出身者で4地区である。農村出身者は完全悲観型でも非移動者よりも多い。農村出身者は完全楽観型でも完全悲観型でも他の出身者よりも高い比率を示し，より多くが二つの型に集中しているといえよう。ただし，非移動者が6地区で地区平均より高い比率で，完全悲観型を示しながら，1地区で完全楽観型を示したことに比較すれば，農村出身者は8地区で完全悲観型を示し，6地区で完全楽観型を示しており，楽観的な生活実感を有し易いといえよう。逆に，非移動者は悲観的な生活実感を有し易いといえよう。